

実習報告(基盤教育実習)

子どもの深い学びを生み出す学習環境デザイン
ー小学校体育授業における実践ー

井崎 夢元 (授業実践探究コース)

1. 探究実習のテーマと設定の理由

文部科学省が2008年に改訂した小学校学習指導要領解説体育編によると、学校体育は子どもたちの「体力の保持増進」と「豊かなスポーツライフの実現」を究極の目標として展開されている。その目標達成のための体育授業を考える学習観の一つとして「技能を身に付けさせることが体育である」という考え方があり、このような「技能主義」の学習のパラダイム(ものの見方)を「行動主義的学習観」と呼ぶ(松田, 2016:15)。また「行動主義的学習観」を「体育を教える多くの人が、知らず知らずのうちに巻き込まれている、一つの『癖』である」とも指摘している。この学習観に基く体育授業では、技術・技能を習得することが目的とされた授業が多く展開される。このような学習では、教師が設定する技術・技能に関する目標が達成できなかった子どもは、その運動やスポーツに対して面白さや意義を見出すことが出来なくなるのではないだろうか。それは結果として、学校体育の究極の目標である「豊かなスポーツライフを実現すること」を阻害する要因となりうると考える。

このような「技能を身に付けさせることが体育の学習である」という考えに対して、体育科の目標達成のために、私は単に技術や技能を習得するだけの体育の授業ではなく、子どもがそれぞれ運動・スポーツの固有の面白さに触れることのできるような授業、つまり子どもが運動を行う価値や意味を見出して取り組むことが出来るような授業を小学校において展開していきたいと考えている。この考え方は「構成主義的学習観」に沿った考え方である。松田(2016)は、構成主義的学習観の立場から体育における学びを『意味』を活性化させ、『技能』や『態度』や『思考・判断』を新たに獲得するとともに関係づけ直すこと」と捉えている。ここでの「意味」とは、「運動の特性や魅力、あるいは運動の楽しさ」のことである。この考えに基づき、子どもが自ら、運動を行う価値や意味を見出すような授業を行うためにはどのような授業にすれば良いのかを研究していきたい。

体育授業において子どもが自ら運動を行う価値や意味を見出して取り組むことができるようにするためには、一過性の楽しさ経験ではなく、運動することに価値や意味を見出せるような楽しさ体験を子どもたちに積ませることが重要であると考えている(鈴木, 2009)。また、久保(2015)は「運動することに価値や意味を見出せるような楽しさ体験を積ませるためには今持っている力をスタートとし誰もが楽しめるような授業づくりが重要である」と述べている。さらに構成主義的学習観に基づくと、運動やスポーツの価値や意味は「自己」「他者」「モノ」との相互の関わりの中で構成されていくとされている(松田, 2016)。これらのことから、「自己」を取り囲む「他者」や「モノ」、いわゆる「学習環境」を工夫することが授業づくりの出発点であると考えられる。このことから誰もが今持っている力から運動に取り組みながら、子どもたちが自ら運動を行う価値や意味を見出していくような授業を学習環境デザインの視点から検討していく。

2. 基盤教育実習の研究目標

- ①体育授業における児童の実態把握を行う。
- ②子どもたちを取り巻く学習環境の実態把握を行う。
- ③子どもが運動をすることの意味や価値を見出すような授業開発の検討を行う。

3. 探究実習の概要

今回の基盤教育実習では、前半 10 日間（9 月後半）は全学年クラスの体育の授業に入り、参観または授業者の補佐などを行いながら子どもたちや授業の様子を観察・記録した。後半 10 日間（10 月以降）は 5 年生のクラスに固定で入り、様々な教科の授業の様子を参観、授業者の補佐等を行った。実習での観察の視点としては、基盤教育実習の研究目標①、②に沿って、①子どもたちの授業での様子②授業における学習環境の 2 つに絞って行った。視点の②に関しては、今回は先行研究を基に学習環境を「空間・活動・共同体」の 3 つを切り口とした(美馬・山内, 2005)。

4. 探究実習の成果と課題

○成果

①子どもたちの授業での様子

子どもたちは体育授業を楽しんで行っているように感じる。しかし、自分ができるようにないことに関してはやりたがらず、すぐに諦めてしまう子が多い。マット運動の授業において、「後転ができないからやりたくない」という児童の声もあった。子どもたちの中には「できない」ことに対する嫌悪感が強いように感じる。「できないこと」に対しての嫌悪感がかなり強いという実態を踏まえると、やはりまずはどの子も今もっている力で楽しめるような運動の関わりから学習を始め、徐々に学習を発展させていくという学習の道筋を仕組む必要があると考えた。

②授業における学習環境

空間に関して、実習校は 2018 年に全国学校体育研究大会で授業校になっていることもあり、体育の授業では教材づくりや場の設定などが細やかに行われていた。学校自体に用具も整っており、必要であれば教師が作るなどして子どもたちの学習環境を整えてある。

活動に関して、ある「跳び箱運動」の授業では「今もっている力⇒新しい(工夫した)力」という学習過程で授業を行われていた。また「マット運動」の授業においては、子どもたちが 4 列に並び、目の前のマットで一斉に決められた技をするような活動が行われていた。

共同体に関して、主に集団種目はグループ学習、個人種目は個人学習というスタイルで行われていたように感じる。子どもたちは必要であれば「どうやったらできる？」とアドバイスを求めるなど他者と会話をしたり、他の人に自分の動きを見てもらうなど、協働したりするような様子が見られた。

○課題

松田(2016)は運動嫌いで「できないから面白くない」と考えている子ども達への授業づくりで必要なことを「運動に子どもを合わせるのではなくて、子どもに運動を合わせる」、「場やモノを工夫すること自体に、学習のねらいを持たせる」の 2 点であると述べている。この松田が述べる 2 点を援用した授業を行うことで子どもたちの「できないからやりたくない、面白くない。」という意識の改善につながるのではないかと考える。このことに関してはさらに理論研究を推し進める必要がある。また、どの子も今もっている力で楽しめるようにするには、運動をより子どもたちの実態に合わせる必要がある。そのためには、子どもたち一人ひとりの阻害要因のなどの実態をより調査する必要がある。アンケート調査を行うなどして詳しく実態把握を行っていきたいと考えている。

学校課題探究実習にて授業を行うにあたって、自分の授業実践力も一つの課題であると考え。学校課題探究実習が始まるまでに、授業実践を行いながら、徐々に自分の授業実践力を磨いていきたいと考える。